今昔物語集の標題について

宮田　尚

1

説話集において、所収の各話に標題を付しているものは少なくないが、今昔物語集のそれは、他の作品のばあいとは、かなり様相を異にしている。

たとえば、その形式。今昔物語集とほぼ同じころまでに成立していたとみられる説話集、ないし、それに類する作品においては、標題は主として、主人公の名や、当該話が深いかかわりをもつ寺社名あるいはできごとなどを、なんの説明も加えずに、そのままかかげるという方法がとられている。説話集と限定することにもんだいはあるにしても、今昔物語集の出典のひとつと考えられている往生極楽記しかり、本朝法華験記またしかり、である。霊異記は別だが、所収二七話中に今昔物語集との類話を二一話有する打聞集のばあいにも、やはり同じような、索引的とでもいうべきていの標題が付されている。ところがそれに対して、今昔物語集では、こうした方法による標題はごくかぎられたものになっている。巻によって多少のばらつきはあるけれど、こうした標題は、全体としては一割強をしめるにすぎず、むしろ例外的な存在だといった方がよいくらいの、完全な傍流になっているのである。索引的な標題にとってかわって今昔物語集では、はなしの内容を、だれが、どうした、というかたちに要約した標題が主流をなしている。

2

これは、諸作品の標題をひとわたり見渡すとき、まず目にふれるきわだった現象であるが、要するに、今昔物語集の標題と、その他の作品の標題とのあいだには、ただ単に、同趣のもののしめる割合に違いがみられるというだけでなく、それぞれの場において中心的な位置にある標題の形式が、他方ではほとんど例外的にしかみることができないという、より基本的な点での違いがあるのである。これを角度をかえていえば、今昔物語集は、すでにいわれているように、先行説話集等の本文を継承しながら――、一定の方針にそって多少の改変をほどこしてはいるものの、原則的には比較的忠実に継承していながら、標題だけは、先行説話集等のそれとほとんど無関係に設定している、ということになるであろう。先行説話集等の継

承に際して、標題は、どうやら埒外におかれているらしいのである。

継承と断絶と。これは、おそらく説話史の流れのなかでの、今昔物語集の位置を示す縦軸と横軸である。今昔物語集が資料として用いた往生極楽記や本朝法華験記、あるいは霊異記などに、現在みるような標題がつけられており、今昔物語集の標題もまた、その編集時につけられたものであるとするならば、という、あくまでもこれは仮定のうえにたってのいいであるが、この継承と断絶とに、わたしは、今昔物語集の姿を見る思いがする。

3

今昔物語集は、先行説話集等を取りこみながらも、けっしてそれに安易にもたれかかることをせず、むしろそれらと訣別し、一線を画した、あたらしい世界を展開しようとした作品ではないか。

たしかに今昔物語集は、先行説話集等の本文を、それも比較的忠実に継承してはいる。けれども、だからといって、今昔物語集を、資料として用いた先行説話集等の集大成をはかったところの、いわば正統的な継承者というわけにはいくまい。すくいあげられなかったはなし、捨て去られたはなしが少なからずあるからではない。先行説話集等を、みずからの論理によって解体し、みずからの体系のなかに組みこんでいるからである。

ひとつの作品は、集合体であることにおいて、はじめて個有の思想をもち、自己を主張しうる。複数の作品が同話を共有する説話のジャンルにあって、それぞれの作品の独自性は、はなしの集合のさまに求めるべきであろう。集合のさまと作品の形質とは、不可分の関係にある。個々のはなしは、作品の構成の一単位でしかない。

それゆえ、個々のはなしはいかに忠実に継承されていても、それが今昔物語集の論理で解体され、今昔物語集の体系に組みこまれているのであるのならば、資料として用いられた作品の生命は、失なわれているとみなければなるまい。個々のはなしに、同じ発想にもとづいて手が加えられているとすれば、なおさらのことである。そこにあるのは、もはや、今昔物語集の論理と体系とを具体化するための、材料でしかない。

ひとつの例として、本朝法華験記をあげておこう。法華験記は、霊異記からはなしを取りこんでいるが、それでいて、ふたつは、ほとんど重なりあうことのない異質な作品である。法華験記にとって霊異記は、借景としての位置にもない、そこにくりひろげられているのは、自前の、法華験記の世界なのである。

今昔物語集が継承しているのは、要するに、それぞれの作品における集合の精神とは無縁の、形骸にすぎないのである。魂はおきざりにしたまま、かたちだけを継承しているのである。質が変えられている以上、今昔物語集を、先行説話集等の延長線上にある作品だというわけには、とうていいかないであろう。

今昔物語集の継承は、断絶を前提とすることによってなりたっている。したがって、考えようによれば、それは断絶の一形態なのだということもできるであろう。

説話史の流れのなかでの今昔物語集の位置、あるいは特色を、断絶にあるとみるのは、砂上楼閣の極論であろうか。

4

先行説話集等との標題の様相の違いは、本文におけるこうしたありかたと呼応しているのであり、今昔物語集が、先行説話集等とは違った、あたらしい世界の展開をもくろんでいることのあらわれなのではないか、とわたしは考える。

5

今昔物語集には、はなしの内容との関連のぐあいからみて、なんらかの不自然さの指摘できる標題が少なくない。私見によれば、それはおよそ九〇例におよぶ。

たとえば、巻三第六話「舎利弗、慢阿難語」。

標題を額面どおりにとるとすれば、このはなしは、舎利弗が阿難をはずかしめたことを内容とするものでなければなるまい。ところが、じっさいは、そうではない。はなしは逆で、阿難が舎利弗をやりこめているのである。いま少し具体的にいうと、この巻三第六話は、いつも舎利弗に小ばかにされていた阿難が、「我レ何デ舎利弗ニ勝ム」と考えて一計を案じ、病気見舞に来た舎利弗が法衣を着ていないのに目をつけて、枕もとのかゆをすすめたところ、舎利弗はまんまと策にはまり、法衣を着ないで施しを受けると畜生になるとの教えを忘れてかゆを食べたため、牛になってしまった、という内容である。舎利弗は、あなずるどころか、逆に、してやられているのである。舎利弗が阿難をあなどったとの記事はたしかにあるし、そのことが、本話の興味の中心である阿難の反撃を呼ぶことになるのであるが、「然レバ舎利弗、常ニ阿難ヲ慢リ給フ」は、あくまでも背景でしかない。主題ではないのである。

発端、背景、付けたりの後日譚などのような、主題と直接かかわりのない部分をふまえてつけられた標題は、けっして適切なものだとはいえまい。主題を異にする複話構成のはなしの、一部分をふまえた標題も同様である。

「天竺国王好美菓、人与美菓語」（巻五第十六話）、「慈覚大師亘唐伝顕密法帰来語」（巻十一第十一話）、「三条大皇大后宮出家語」（巻十九第十八話）などは、この類に属する。

また、たとえば、巻二十五第七話「藤原保昌朝臣、値盗人袴垂語」。

十月の、月のおぼろなる夜、通りかかった保昌の衣服を奪い取ろうとして、刀を抜いて襲いかかった袴垂。襲われながらも、平然として、笛を吹きつつ都大路をねり歩く保昌。本話は、このふたりの対決のさまに興味の中心をおいているのであるから、そのかぎりでは、どちらを主人公にしてもよさそうにみえる。保昌を主人公とし、保昌が袴垂に会ったはなしだとする本話の標題に、不都合はなさそうにみえる。だが、「今ハ昔、世ニ袴垂ト云極キ盗人ノ大将軍有ケリ、心太ク力強ク、足早、手聞キ、思慮賢ク……」と、袴垂の説明で筆をおこしているところからすれば、本話は元来、袴垂を主人公とし、彼が保昌に会ったはなしなのだとみるべきであろう。冒頭に主人公の説明をかかげるのは、説話の叙述の基本原則のひとつである。記述こそ簡略であるが、「昔、袴垂とて、いみじき盗人の大将軍ありけり」と書きおこしている宇治拾遺物語の同話は、げんに

「袴垂合保昌事」との標題を付している。

主人公がだれかという点は、しばしば、主題がなになのかというもんだいとからみあう。本話においても、保昌を主人公とみれば、豪胆ばなしということになるし、袴垂を主人公とみなせば、とうぜん、盗賊ばなしとしての側面が強調されることになる。甲、乙ふたりの人物が、ほぼ同じような比重で登場するからといって、どちらを主人公とした標題であってもよいというわけにはいかないのである。

とまれ、本話の標題は、元来、主人公であるはずのない人物を主人公にみたてている点において、適切なものだとはいいがたい。この類に属するものには、「大学衆、試相撲人成村語」（巻二十三第二十一話）、「播磨国郡司家女、読和歌語」（巻二十四第五十六話）などがある。

また、たとえば、巻二十八第二十五話「弾正弼源顕定、出閤被咲語」

右大臣の列席した公事の席での、顕定の「折節不知又由无キ戯レ」を目のあたりにして、職事の範国は、たしかに笑ってはいる。だが、それは範国が笑ったのであって、顕定が笑われたのではない。顕定は、むしろ、範国を笑わせているのであり、笑わせられた範国を笑っているのである。事情を知らない右大臣から、公事の席で笑ったことをとがめられて困惑している範国を、顕定は「極テ可咲」と思いつつ眺めている。

つまり、本話は、笑われたはなしではない。笑わせたはなしであり、さらに正確にいえば、笑わせられたはなしなのである。

だれが、どうした、というかたちで事柄を語る説話において、肝心の、どうした、の部分にみられるこうした現象は、錯誤によるものだとするには、あまりに不用意にすぎよう。

「舎衛国群賊、殺迦留陁夷語」（巻二第二十九話）、「波斯匿王、請羅睺羅語」（巻四第二話）、「玄昉僧正、亘唐伝法相語」（巻十一第六話）、「左京属紀茂経、鯛荒巻進太夫語」（巻二十八第三十話）など、この類に属するものは少なくない。

6

はなしの内容との結びつきの不自然な標題のなかには、「聖武天皇、始造元興寺語」（巻十一第十五話）、「産女、行南山科値鬼逃語」（巻二十七第十五話）などのように、不注意によるとみられるものもあるにはある。だが、大半は、どうやら意図的な作意によるもののようである。作意は、おそらく、隣接するはなしとの関連を考慮し、形式上の調和をはかることをねらいとするところより発している。

右の巻三第六話において、主題とはうらはらの、舎利弗が前面におしだされていることの不自然さは、「舎利弗・目連、競神通語」と題する前話が、舎利弗と目連とが験くらべをし、舎利弗が勝つはなしであることと重ねあわせることによって説明がつく。第六話では、とにもかくにも、優者としての舎利弗が必要なのである。

本来ならば、袴垂を主人公とする盗賊ばなしであるはずの巻二十五第七話で、保昌が標題で重んじられているのは、これを豪胆ばなしとして性格づける必要があったからである。豪胆ばなしであるこ

とは、これを巻二十五に収録するためにも、また、第六話と対応させるためにも必要なことであった。第六話「春宮大進源頼光朝臣、射狐語」では、頼光の超人的な弓の名手ぶりが語られている。刀を抜いて襲いかかろうとした盗賊の大将軍をして、えたいの知れない恐怖心のとりこにさせた保昌の超能力ぶりを伝える第七話は、第六話に対応するかっこうの条件をそなえているのだが、主人公が袴垂では、せっかくの好条件も生かされない。

巻二十八第二十五話のばあいにも、事情は同様である。五十余年も穀断ちをしているとのふれこみで、天皇の信もえていた聖人が、じつは、ひそかに白米を食っていたとわかり、米糞の聖、とののしられる第二十四話の標題が、「穀断聖人、持米被咲語」。除目の時の陣の御座で冠を落し、満座の笑いを買った外記のはなしである第二十六話の標題が、「安房守文室清忠、落冠被咲語」。このはざまにある第二十五話に、「被咲」以外の標題をもってくるわけにはいくまい。

右に例示した標題はもちろんのこと、その他のばあいでも、本文と標題との結びつきに不自然さのみとめられるものの周辺をみていくと、大半のものについては、このように、本文とのつながりは不自然である一方で、隣接するはなしの標題とは通じあうものをもっているという事実がえられるのである。標題は、一義的にははなしの顔である。はなしにこそ密着しているべきなのに、ある種のものはそれからはなれ、今昔物語集ではじめて隣りあわせた、生いたちを異にするはなしの標題と、密接なかかわりあいをもっているのである。こうした不自然さは、今昔物語集の作意なしには、とうてい生じえないものだといってよいであろう。

今昔物語集の標題について

7

ところで、今昔物語集の標題の形式が、先行説話集等に例をみないものであることはさきにふれたとおりであるが、現存の作品に同じような標題をつけているものがないからといって、当時にもなかったというわけにはいくまい。作品間に直接間接の影響関係があるうえ、散佚作品も少なくないと考えられる説話文学のつねとして、今昔物語集に影響をおよぼしているかもしれない、しかも、同趣の標題をそなえた散佚作品の存在した可能性は、ここでも、とうぜん考慮しておかなくてはなるまい。げんに、資料的には、今昔物語集以前に成立していた作品の流れを、今昔物語集以上に忠実にふまえているかと思われる宇治拾遺物語に、今昔物語集と同趣の、だれがどうした、というかたちをとっている標題が五割強求められることでもある。

だが、結論的にいえば、個々のはなしについてはともかく、集規模でみたばあい、今昔物語集以前に、今昔物語集に匹敵するほど周到に、形式的にも整備された標題の付された作品があったかどうかは、すこぶる疑わしい。

いまいうように宇治拾遺物語は、今昔物語集と同趣の標題を半数余り有していて、現存の説話集では今昔物語集にもっとも近く、その意味でいちおう注目されるのだが、今一歩ふみこんでみると、集規模で形式の統一がはかられた形跡はみとめられず、また、個々の標題においても、どうした、に相当する部分の説明があいまいで、今昔物語集のばあいほど具体的でない、といったぐあいであって、

つまり、実体は、今昔物語集からそうとうかけはなれているのである。したがって、このことをもってすれば、かりに、宇治拾遺物語に大量のはなしを送りこんでいる散佚作品Xがあり、今昔物語集もまた、その作品を重要な資料のひとつとしているとしても、今昔物語集の標題が、散佚作品Xからひきうつしされたものだとは考えにくい、ということになるであろう。本文の一般的な特性からして、形式好みであることの知られる今昔物語集が、散佚作品Xの不整備な標題をみずからの好みにしたがって改変することはありえても、その逆に、散佚作品Xで整備された標題がつけられているものを、あえて統一性に欠ける、不整形なものにしなければならない必然性が、宇治拾遺物語にあるとは考えられないからである。もしこのような、両者の共通母胎たる作品があり、それに標題がつけられていたとするならば、それはおそらく、今昔物語集よりも、宇治拾遺物語に近いかたちであったとみるべきであろう。

8

今昔物語集と同趣の標題を有する現存の説話集等がなく、散佚作品にも、今昔物語集に通じる標題を付したものがあったと確定できないとしても、だからといって、今昔物語集のそれが、創意にかかるものだということにはならない。別稿でもふれたところだが、今昔物語集のこの方法は、三宝感応要略録に触発されて、今昔物語集がはじめて組織化した方法ではなかったか、とわたしは考えている。だれが、どうした、というかたちへの整備の状況は、三宝感応要略録との関連の強い震旦部がもっともすすんでおり、天竺部と本朝仏法部とがそれに続き、本朝世俗部がいちばん形式上の統一性に欠けることなどは、この推測のひとつの傍証となるかもしれない。

9

中国の状況にくらいので断定的なことはいえないが、三宝感応要略録のような、だれが、どうした、というかたちの標題を付した作品は、蒙求などにみられはするものの、中国古典においても、〈少数派〉であったのではないか。

もしそうだとすれば、今昔物語集の標題は、三宝感応要略録に触発されたものではあるにしても、画期的とも評しうるような、ずいぶん思いきった、斬新なものであったということになる。

10

仮定のうえに仮定をつみあげることになるけれど、画期的に斬新な標題を採用した今昔物語集であってみれば、標題には他にひけをとらないほどに関心を寄せていたとみなければならず、したがって本文とのつながりの不自然な標題を付していることには、それなりのもくろみがあったはずだということになろう。

思うに、今昔物語集は、無理を承知のうえで、一部のはなしの標題を設定しているのであろう。逆にいえば、標題に人一倍関心を寄せているはずの今昔物語集が、あえて本文とのつながりを犠牲にしてまで無理な標題を設定しなければならないほど、それほど今昔物語集にとって、隣接するはなしの標題との調和は、重要な意味をもっていた、ということになろう。

11

今昔物語集の説話配列が、二話一類の基本原則にもとづいてなされていることは、大方のみとめるところであろう。本文の二話一類とかならずしも一致するわけではないが、標題における隣接するはなしとの調和も、けっきょくのところ、本文における二話一類の発想と軌を一にするものだといってよさそうである。

先行説話集等からの離脱。斬新で、画期的な形式。これらはいずれも、今昔物語集においてはじめて試みられた集合体系を完成させるべくもくろまれた、いわば、あたらしい方法の模索、あるいは、あたらしい世界の開拓をめざした営為の一環なのではないか、とわたしは思う。